375.9
Mo14
資料室

師範被服

本科用二

文部省

（第一綴）

50082

教科書文庫

5
920
51-1946
20000
16123

375.9
Mo14
廣島大學圖書之印
廣島大學圖書之印
廣島大學教
46123
図書

資料室

目次

第一章　漂白……一
第一節　主な漂白劑……一
第二節　諸種纖維製品の漂白……二
第二章　しみ抜……七
第一節　しみ抜の一般……七
第二節　諸種のしみ抜……八
第三章　防水性・防火性の附與……一一
第一節　防水性を與へる法……一一
第二節　防火性を與へる法……一三
第四章　平常着　夏季用……一四
第一節　活動着（女子用）……一七
第二節　通常着……三六
第三節　洋式標準服（婦人標準服甲型）……四四
第五章　平常着　冬季用……六〇
第一節　活動着（女子用）……六二
第二節　通常着（男子用）……七一
第三節　洋式標準服……八七
第六章　外被類……九一

師範被服

本科用　卷二

第一章　漂白

第一節　主な漂白劑

漂白劑には種々あるが、その漂白作用により、これを酸化性漂白劑と還元性漂白劑の二種に大別する。㊀

酸化性漂白劑　晒粉・次亞鹽素酸ナトリウム・過マンガン酸カリウム・過酸化ナトリウム・過酸化水素・過硼酸ナトリウム

還元性漂白劑　亞硫酸ガス・酸性亞硫酸ナトリウム・ヒドロサルファイト

○　漂白はどんな場合に行ふか、その利害得失について考へよ。

㊀　漂白劑には纖維の種類により適否がある。纖維素纖維の漂白には、晒粉または次亞鹽素酸ナトリウムを、動物性纖維及びその交織物の漂白には、過硼酸ナトリウムもしくはヒドロサルファイトを用ひるのが適當である。

第二節　諸種繊維製品の漂白

一、木綿製品の漂白

水千に晒粉五乃至八の割合の溶液に豫め洗濯したものを入れ、再三繰返してそのまま三十分乃至一時間浸けて置く。その間二三回品物を上下にかへして漂白斑ができるのを防ぐ。而して所望の白さになつたら取出して搾り、輕く水洗ひし、極く薄い硫酸水または鹽酸水に二十分間位浸し、搾つて晒粉の臭氣のなくなるまで十分水洗ひする。(三)なほ晒粉の溶液に晒粉十に對して重炭酸ナトリウムを七乃至十の割合に加へると、加へない場合に比し頗る短時間に漂白される。漂白に用ひる器物は、木製の物又は陶磁器、琺瑯引の物がよい。

○　晒粉の臭氣の殘つておるものをそのまま乾かすと惡いのはなぜか。

(三)　水洗ひをしても容易に晒粉の臭氣がぬけない場合には、多量の清水中に長く放置するがよい。急ぎの場合には、チオ硫酸ナトリウムその他の鹽素消劑の少量を溶かした水中に暫時浸し、次に水洗ひする。

晒粉溶液の漂白作用に關しては種々の說があるが、先づ空氣中の炭酸ガスとの作用によつて次亞鹽素酸を生じ、これが發生期の酸素を放出して繊維上の色素を酸化漂白し、次亞鹽素酸の分解によつて生じた鹽酸は、漂白液中に生成せらるべき炭酸カルシウムに作用して炭酸を生ぜしめ、これがまた晒粉の溶液に作用して次亞鹽素酸を遊離せしめる。また鹽酸は直接晒粉にも作用して次亞鹽素酸を遊離せしめる。而してここに遊離した次亞鹽素酸はまた分解して色素を酸化漂白するなど、これ等の反應が逐次反復されて繊維が漂白されるのであると解してよい。

漂白したものを一層白いやうに見せるには、極めて微量の可溶性紺青を溶かした水中に浸して青味付を行ひ、搾つてそのまま乾かす。

○　漂白操作中にはどんな注意が必要か。

二、麻製品の漂白

漂白・青味付等は木綿製品の場合に準じて行ふ。但し晒粉溶液の濃度は、木綿製品の場合よりも幾分薄いものを用ひ、強く搾ることを避ける。

三、人絹・スフ製品の漂白

イ、晒粉溶液を用ひる漂白

木綿製品の漂白に準じて行ふ。

○　濕潤狀態に於ける人絹・スフ製品の取扱ひにはどんな點に留意すべきか。

ロ、次亞鹽素酸ナトリウム溶液を用ひる漂白

晒粉の溶液に炭酸ナトリウムの溶液を加へると、炭酸カルシウムの白色沈澱を生ずる。そこで炭酸カルシウムの沈澱を更に生じなくなるまで炭酸ナトリウムを加へ、暫時放置し、白色沈澱を沈降せしめてその上澄液を用ひる。かくして得る漂白液には、主として次亞鹽素酸ナトリウム及び食鹽が含まれてゐる。炭酸ナトリウムの所要量は、結晶ソーダならば、晒液の重量の二・二乃至二・五倍程度である。漂白液の濃度操作は、晒粉溶液を用ひる場合に準ずる。(三)

次亞鹽素酸ナトリウムの溶液は、晒粉の溶液よりも安定度高く、滲透性に富んでゐるから、漂白斑を生ずる虞が少い。その代り晒粉溶液に比べると一般に漂白作用は幾分緩徐である。漂白を促進する必要のある場合には、適量の重炭酸ナトリウムを加へるがよい。

次亞鹽素酸ナトリウムによる漂白に於ては、漂白中に炭酸カルシウムが生成されないから、手觸りの柔らかな漂白結果を得るに都合がよく、晒粉の溶液を用ひた場合のやうな繊維上の炭酸カルシウムを溶し去る目的を以て行ふ酸水通入は、必ずしも必要としない。

四、絹及び羊毛製品の漂白

イ、過硼酸ナトリウムを用ひる漂白(四)

温湯千に對し、過硼酸ナトリウム五乃至十の割合の溶液に豫め洗濯した品物を入れ、徐々に加熱して六十乃至七十度に至らしめ、この温度で一、二時間操作し、所望の白さになつたなら取出してよく水洗ひする。水洗ひした後、薄い醋酸水に通入し、更に水洗ひするもよい。漂白に用ひる器物は金屬製を避け、陶磁器・硝子器または琺瑯引の類を用ひる。漂白後に行ふ青味付が必要な場合には、鮮明な青の酸性・鹽基性もしくは直接染料の微量を水に溶して微かに空色になつた冷水(羊毛製品の場合には少し温めるがよい)で灌げばよい。

(四)過硼酸ナトリウムを水に溶せば、徐々に分解して過酸化水素・硼砂及び苛性ソーダを含む液が得られる。隨つてその漂白效果は過酸化水素による漂白と同樣である。しかも過硼酸ナトリウムは安定であり、水千に對し五乃至十の割合の溶液のアルカリ度は比較的小であつて、動物性繊維に傷害を及ぼす虞がないから、過酸化水素を用ひる方法や、過酸化ナトリウムに硫酸を作用し過酸化水素を自製して漂白する方法に比べると、その取扱ひが簡便である。

ロ、ヒドロサルファイトを用ひる漂白(五)

冷水千に對しヒドロサルファイト六乃至十の割合の溶液に豫め洗濯した品物を入れて數時間乃至一夜間浸漬しておく。(六)次に輕く水洗ひし、少量の醋酸を加へた冷水中に暫く通入しておいて水洗ひする。漂白に用ひる器物は金屬製を避け、木製の物又は陶磁器、琺瑯引の物がよい。

㈤　ヒドロサルファイトの水溶液は、ズルフォキシル酸ナトリウムと酸性亜硫酸ナトリウムとに分れてゐると見做され、その還元漂白力は酸性亜硫酸ナトリウムを用ひる漂白よりも旺盛である。酸性亜硫酸ナトリウムによる漂白は、羊毛製品に對しては有效であるが、絹の漂白に對しては效果が乏しい。しかるにヒドロサルファイトは簡易に兩者の漂白に適用できるから便利である。

㈥　四十度位に溫めると一層よく漂白される。但し溫度があまり高すぎると種々な不利をもたらすから、加溫するとしても四十度乃至五十度以上にしない方がよい。

五、交織物の漂白

混紡・混織製品中、動物性纖維の存在しない物は、晒粉または次亞鹽素酸ナトリウムの溶液を用ひて差支ないが、動物性纖維を含む場合は、過硼酸ナトリウムもしくはヒドロサルファイトの溶液を用ひ、それぞれ既述のやうにして漂白する。

第二章　しみ抜

第一節　しみ抜の一般

一、しみ抜の必要

しみのついてゐる被服をそのまま纏ふことは、衞生上・容儀上に惡いばかりでなく、その保存上にも不利である。而してしみは一般に、時日が經つと抜け難くなるものであるから、これを發見したならば速かに適當な處置をとらねばならない。

二、しみ抜きの方法

しみの種類は頗る多く、同種のしみでも地質・染色などによつてしみ抜の方法を異にすべき場合もあるから、その方法は多種多樣である。而してその主な手段は、機械的方法によるもの、吸着もしくは乳化分散作用によるもの、溶媒で溶かし去るもの、アルカリ處理によるもの、酸處理によるもの、漂白劑處理によるもの、その他の藥劑處理によるものなどに大別される。

一般にしみ抜を行ふには、糊氣の無い乾いた晒木綿の類を四つ折位に重ねて下敷とし、その上にしみの部分を擴げ、適當な溶媒もしくは藥液を與へ、壓しつけてしみを下敷布に移行させる。しみがと

れたら、下敷布の位置をかへ、乾いた布片で壓しつけて餘分の液を吸ひとらせる。

揮發性溶媒を用ひてしみ抜を行つた場合や、その他特別の場合の外は、一般にしみ抜した後その部分に殘つてゐる藥液を水を以て下敷布に移すか、或は水洗ひして完全に除き、最後に乾いた布片で壓しつけて餘分の水を吸ひ取らせる。

○　水際のつくのを防ぐにはどうするか。

第二節　諸種のしみ抜

泥　直ちに水で洗ふか、乾いてから揉み落すか、刷毛で拂ひ落す。完全に落ちない場合には石鹸液で洗ふ。

醬油・味噌汁・砂糖・菓子類・酒類・コーヒー等　冷水または溫湯で洗ふ。もし完全に落ちなければ石鹸液で洗ふ。

血液　石鹸液またはふのりの微溫湯で洗ふ。

墨汁　石鹸液で洗ふ。或は小鳥の糞を溫湯で煉つて汚點の部分に塗り込み、二十分位經つてから揉み抜き、次に石鹸液で洗ふ。

油脂類・機械油・烏もち・石炭タール　揮發油またはベンゾールで溶かしとる。

塗料・油繪具・印刷インキ類　揮發油で處理し、それで不十分ならば石鹸液で洗ふ。

乳汁　揮發油で處理し、次に石鹸液で洗ふ。

酸類　薄いアンモニヤ水で洗ふ。梅干などのしみも同樣にする。

果物　アンモニヤ水、硼砂または石鹸液で洗ふ。

黴　風通しのよいところに擴げて乾かし、刷毛で拂ひ、次に薄いアンモニヤ水で拭く。

汗　薄いアンモニヤ水で洗ふ。或は石鹸液で洗つてから、一旦水洗ひし、蓚酸の溫湯をつけては水洗ひすることを反復する。

蓚酸處理のために色が變つた場合には、次に薄いアンモニヤ水で洗ふ。蓚酸の代りに過硼酸ナトリウム溫液を用ひて同樣にするのも效果がある。

鐵銹　蓚酸で處理する。色物の場合には蓚酸をやや薄くして用ひる。水洗ひした後もなほ變色してゐる場合には、薄いアンモニヤ水で處理する。

筆記用インキ　蓚酸の溫液で處理し、次にアンモニヤ水とアルコールとの混合液または石鹸水で洗ふ。白物についたしみでなほ色が殘る場合には、色インキのしみ抜の場合のやうに、纖維の種類に應じ適當な漂白劑を用ひる。

色インキ・色鉛筆　繊維素繊維の白物についたしみは、先づ石鹸の溫湯でしみの部分を洗つて一應これを落してから水洗ひし、晒粉の溶液を應用して抜く。

動物性繊維の白物の場合には、過マンガン酸カリウムの溶液と酸性亜硫酸ナトリウムの溶液とを應用し最後に水洗ひする。この方法は繊維素繊維の白物にも適用される。

色物の場合には、アルコールに少量の醋酸を加へた液でしみの部分を洗ひ、次に薄いアンモニヤ水で洗ふ。これでなほ落ちなければ、石鹸とアンモニヤ水とを含む液、またはこれに米糠を加へた泥狀液で洗ひ、できるだけインキを落して水洗ひする。

沃度チンキ　チオ硫酸ナトリウムの溫液をしみの部分に塗り、暫くして水洗ひする。

第三章　防水性・防火性の附與

第一節　防水性を與へる法

一、防水布

防水布は織物を絶對に、もしくは或る程度まで水を通さぬやうに加工したもので、所望の防水程度に應ずる種々の仕方がある。而して一般に防水加工を施せば多少とも被服の通氣性を防げるものである。

○　防水加工を可とする場合と否とする場合とを考へよ。

二、簡易に防水性を與へる法

イ、アルミニウム石鹸による防水

織物を石鹸の溶液とアルミニウム塩の溶液に交互に浸すことによつて、繊維上にアルミニウム石鹸を沈着せしめるのである。アルミニウム塩のうちでは、醋酸アルミニウムがこの目的に對し最も適してゐるが、簡單に行ふには明礬を用ひてもよい。

水千に石鹸二十の割合で溶かし、別の器に水千に明礬五十の割合で溶かしたものを用意する。防水を施すべき織物を石鹸の溶液に浸し、よく滲み込ませ、平等に搾つて一旦乾かし、次に明礬の溶液に十分滲み込ませてから取出し、水洗ひして水を切り、皺を伸ばして乾かす。乾いてからこてをかけるか物によつては湯伸しを行ふ。なほ所望の防水の程度によつては前記操作を反復する。

ロ、パラヒン乳劑による防水

市販の防水用パラヒン乳劑を水千に對し二十乃至五十の割合に混じて作つた乳狀液に、織物を浸して十分浸透させた後取出して搾り、皺を伸ばして乾かし、乾いてからこてをかけるか物によつては湯伸しを行ふ。

第二節　防火性を與へる法

織物に防火性を與へる方法には種々あるが、一般に熱により不活性の氣體を發生する化合物（例へば硫酸アンモニウム・燐酸アンモニウム）を纖維に與へるか、熱により比較的容易に結晶水を放出し、また熔融して可燃體の表面を蔽ひ、延燒を防止する作用のある化合物（例へば硼砂）を應用するが、不溶性・不燃性の物質（例へば酸化第二錫）を纖維に沈着せしめるか、或は以上の方法を組合はせることなどである。次にその最も簡單な方法を例示する。

水千に對し燐酸アンモニウム七十五、塩化アンモニウム五十、硫酸アンモニウム二十五の割合に溶した中に織物を浸し、平等に搾つてそのまま乾かす。(七)

(七)　水洗ひすれば防火劑が溶け去り效力を失ふ。洗濯しても效力を失はない方法を家庭に於いて實施することは困難である。

第四章　平常着　夏季用

被服生活の刷新と平常着　わが國では四季の變化が著しく、これが衣食住その他すべての生活と密接な關係をもち、わが國固有の姿を形成する一要素となつてゐる。被服について見ても、四季折々の氣候とその自然的環境にふさはしいやうに發達して來たところにその一つの特色がある。隨つてこれらの理由から自然に被服の種類が多くなり、これに應じて從來はその製作・手入等も複雑になる傾向にあつた。

また儀禮を尚ぶわが國では、身分・職業・性別・年齡等によつても被服の形式が多様になつた傾きが強い。物資に惠まれた平和の時代には、古今を通じわが國民の趣味性は各方面に高度に表現せられたが、被服に於いてもその形態・材質・色・柄等は多彩を極めるものとなつた。

わが國では、古來幾たびか大陸の生活様式を攝取し、これを國民生活の中にとり入れて來たのであるが、明治初年以來は西洋風の生活技術をとり入れて、これをわが國固有の生活様式に醇化せしめようと努めて來た。さうして今こそわれわれはわが國本然の生活に基づき、單純・明朗な被服生活を確立せしめねばならない。殊に平常着はその範圍が極めて廣いから、被服生活刷新の重點はここにある

といつても過言でない。されば平常着の製作については、各方面より見て一層の創意をはたらかせ、工夫を加へる必要がある。卽ち平常着は、着用者の生活活動に基づいて、保健・衞生に適し、活動的で丈夫なものとすることはいふまでもなく、その種類・材質・色・柄などについては十分考慮をはらひ、形式・着裝を簡單にし、且つ出來るだけ手持衣類を利用するなど、勞力・資材を十分活用し以て社會奉仕の誠を盡くさなければならない。なほ全體としての感じは、どこまでもわが國民の平常着として、清純端麗にして且つ潑剌たる意氣と質實剛健の氣風とを表現するものが望ましい。

本卷に於いては、この趣旨に準じて、平常着を通常着（從來の和服）・活動着及び洋式標準服に分つことにした。

夏の被服　夏の被服は保健上から見て、なるべく身體の放熱・發散を妨げないものであることが第一の要件である。さうしてこれらの要件に對する適否には、被服の材料・形態・着裝の如何が大いに關係する。

材料は通氣性に富むものがよい。形については、その大きさ、開口の狀態、身體露出面の多少等が、直接間接放熱・發散に影響する。わが國の夏は高溫多濕の日が多く、殊に無風の狀態に於いてはこれが保健衞生上に及ぼす影響は大きい。隨つて夏は被服についても見苦しくない程度の空隙を保ち、しかもそこに空氣の動きのあるやうなものが適當である。

次に夏は汗の量が多く、汗ばんだ皮膚が他のものに觸れることは極めて不快であるから、被服材料は適當に水分を吸收し、徐々に發散するものがよい。なほ洗濯に耐へる丈夫なものを選ぶとともに、着脫ぎに便利な形とする必要がある。

○　濡れた衣類や汚れた衣類を着るとよくないのはなぜか。

○　身體の露出面を多くすることと禮容との關係について考へよ。

各方面から見て、夏の平常着としての要件を具備するものは、自ら輕快にして活動的なものとなるわけであるが、なほ色・柄についても清楚にしておだやかな感じのものを選び、强い日光にも褪色する憂のないものを用ひるがよい。

帶は、腹部（丹田）に力の入る特長を持ち、且つ保温にも役立つものであるから、腹部の冷え易い夏季にはこれが活用に留意する必要がある。しかし餘り過度に緊縛して、血行を妨げ胸部を壓迫するなどのことがないやうに注意しなければならない。なほ衣類と調和のよいものを用ひることの肝要なことはいふまでもない。

第一節　活動着（女子用）

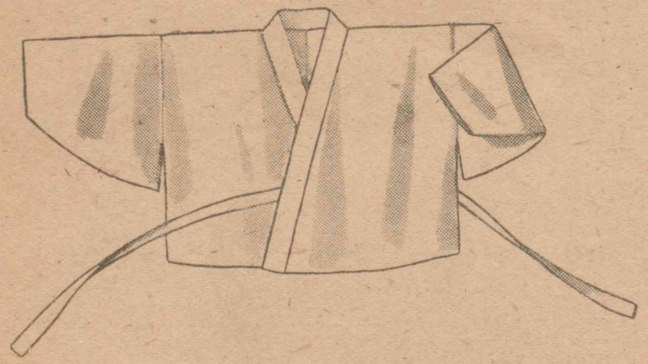
わが國民の被服は、わが國の氣候・風土に適應し、國民性に應じて發達したものであつて、住居とよく調和し、國民の日常生活に固有な傳統的雰圍氣を醸し出してゐる。形が直線的であつて、裁ち方・手入れが簡單であること、仕立直し・仕立替の融通がきくことなども、簡素を好み、物を粗末にせず これを活かして用ひる國民性の現れであり、大いに尊重すべきことである。また從來女子が勤勞の時用ひたもぢり股引などもまことに凛々しい感じを與へるものがあり、今日でも大いに參考すべきである。

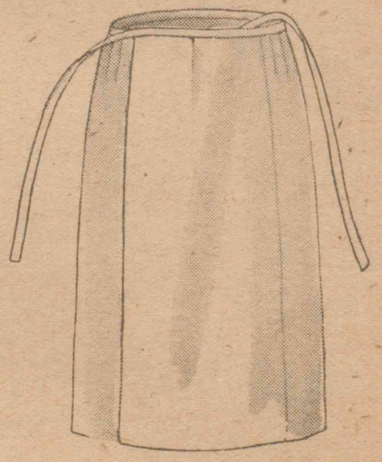
國民の日常生活が活動的になり、家庭に於いても種々の作業を行ひ勤勞に努めることが一段と必要になるにつれて、一般平常着についてもその活動性がいよいよ重要となるに至つた。婦人標準服や女生徒活動基準服は、いづれもこの要請に應じて制定されたものであつて、前記のわが國民の被服の傳統に則とり、日本家屋に於ける起居に適し、保健上にも勝れ、しかも禮を失はずやはらぎをもつ點に、苦心がはらはれてゐる。

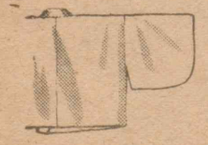
第一項　表着

第一、婦人標準服乙型　二部式

一、形







二、寸法

一衣

丈　裄　袖幅　肩幅　後幅　前幅

袖丈　袖口　袖附　身八つ口　衿幅　衿肩明

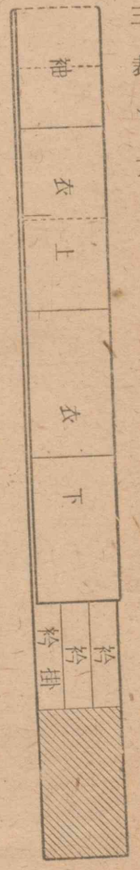
繰越し　前下り

下衣

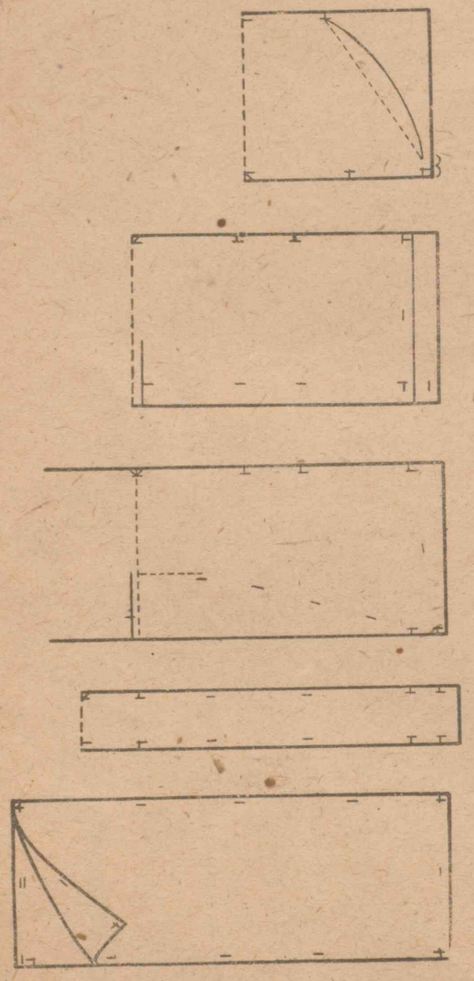
丈　幅（總幅・紐附幅）　紐（丈・幅）

○　各部の寸法を定めるに必要な身體の測定個所について考へよ。

三、裁ち方



四、標附方



○　四布で總幅が廣すぎる場合は、どこで縫ひ込むとよいか。不足の場合はどうするか。

五、縫ひ方

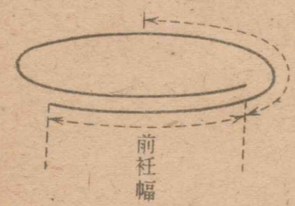
○　舟底袖の袖下の縫ひ代の始末を圖解せよ。

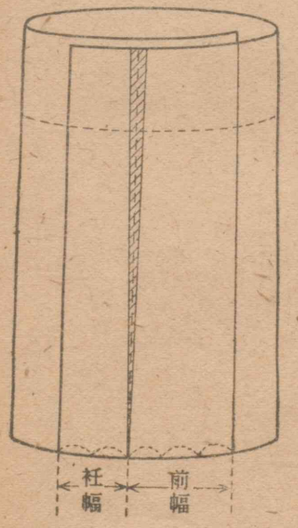
○　掛衿の掛け方について要點を述べよ。

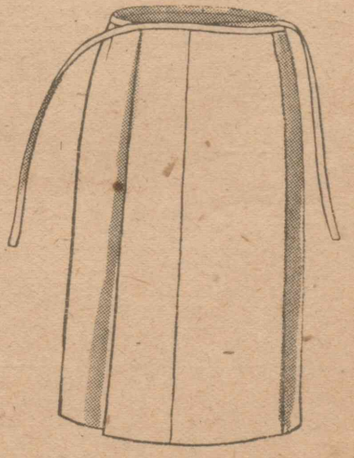
○、下衣の前のつまみはどんな身體の人に必要か。

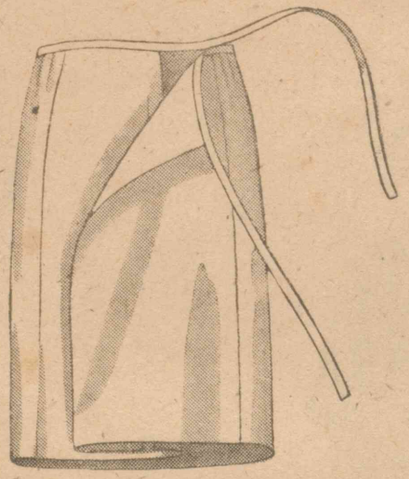
下衣について

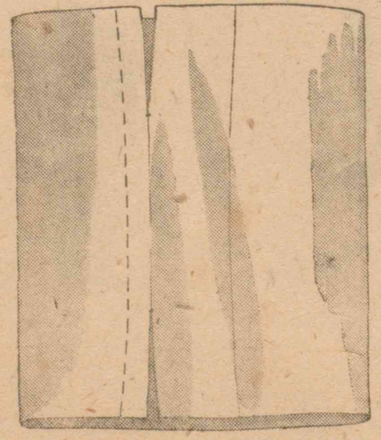
一、衽附のもの











裾總幅は腰總幅に一寸六分を加へる。

後總幅と前衽幅との割合は三對二

前幅と衽幅との割合は三對二

○　以上の割合で各自の後幅・前幅・衽幅を算出し、これを檢討せよ。

第二　女生徒活動服

一、製　式

上　衣（婦人標準服乙型上衣に準ずる）

イ、身丈は腰の邊りまで（胴廻り線より二十糎位長く）

ロ、袖丈は三十糎八寸以内、形は舟底型。

ハ、衿は日本衿とし十五糎四寸位の衿下をつける。

ニ、附紐をつける。

下　衣

イ、着脱ぎに便利なやうに脇明きとする。

ロ、前後に五つの襞を取り、幅一寸三分五糎の紐をつける。

ハ、裾には裾口布をつける。

その他

イ、上衣・下衣ともに冬季用は裕仕立または綿入仕立とす。

但し地質によつては單仕立でもよい。

ロ、身體腰部の保溫を考慮すること。

ハ、寒冷の地方にあつては羽織を着用してもよい。

ニ、物入は上衣・下衣に適當につける。

二、寸　法

上衣

○　婦人標準服乙型に準じ、各自の寸法を考へよ。

下衣

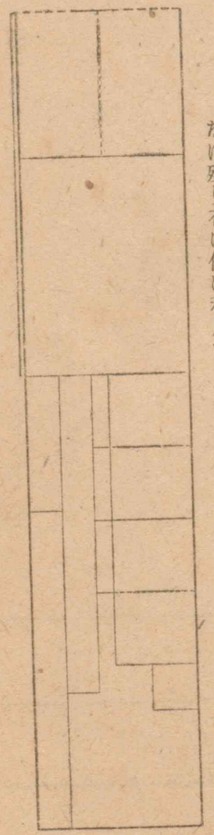
腿幅は腰廻りの四分の一に八寸一分乃至十寸二寸六分加へる。

その他の寸法は作業服下衣に準じてきめればよい。

三、裁ち方（廣幅物）

○　次の裁ち方圖の各部に各自用として適當な寸法を記入せよ。

なほ殘り布は何に利用するとよいか。



○　並幅新規格生地一反を以て裁つ場合の裁ち方・寸法を圖示せよ。

四、仕立方

標附

上衣

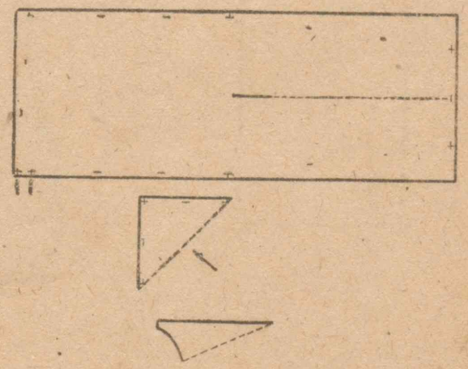
○　上衣の標附を圖解せよ。

下衣

下衣の標附は下圖による。

○　腿幅が狹くて縫ひ込みの多い場合はどうするか。

○　襠の位置・形・大きさについて研究せよ。



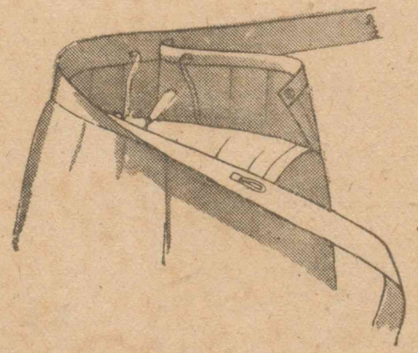
縫ひ方（單仕立）

○　上衣の縫ひ方順序と縫ひ方の要點を考へよ。

○　下衣の縫ひ方順序を考へよ。

○　下衣の縫ひ方につき特に補強を要する箇所はどこか。如何なる補強をすればよいか。

下衣の紐の附け方



○　前内側の小紐・前紐に小さい紐通しのついてゐるのは何のためか。

○　後内側のへらは何の役に立つか。

Approved by Ministry of Education
(Date Apr. 22, 1946)

昭和廿一年四月廿二日印刷
昭和廿一年四月廿六日發行
昭和廿一年四月廿七日翻刻印刷
昭和廿一年五月十日翻刻發行

師範被服　本科用卷二
定價金壹圓參拾錢

昭和廿一年四月廿七日
文部省檢查濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

翻刻發行者　東京都神田區錦町一丁目十六番地　師範學校教科書株式會社　代表者　森下松衞

印刷者　東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　大日本印刷株式會社　代表者　佐久間長吉郎

發行所　東京都神田區錦町一丁目十六番地　師範學校教科書株式會社

上川昭子